

KODAK
LICENSED PRODUCT
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Color Control Patches



監
觴
無
底
抄

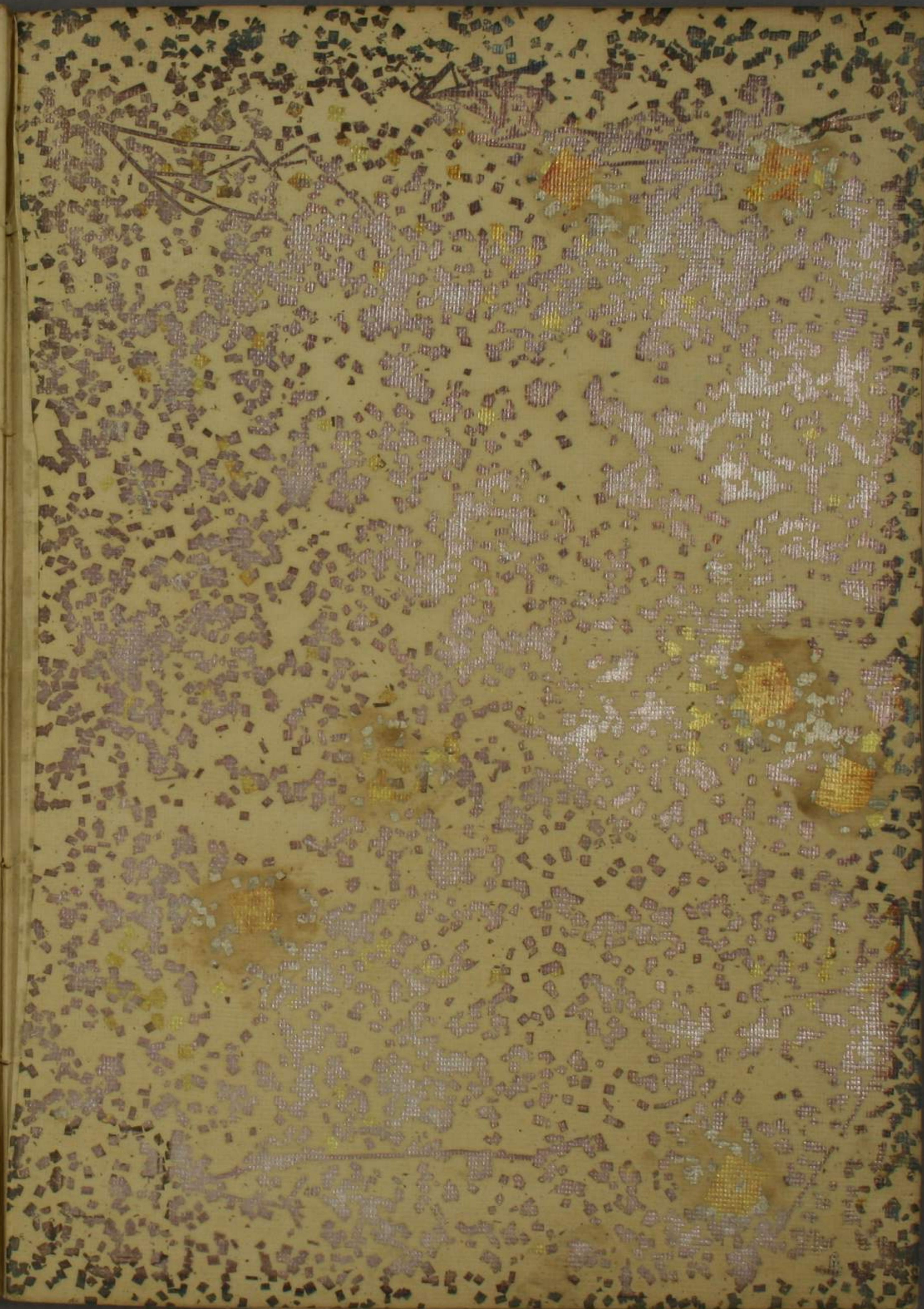
三
三
三

特 別
~12
1077
27





利
1077
2627



常夏

廿六歲

太政大臣

六月六日桑院東御及道遠事

内大臣云達桑會事

源氏為近江君事

源氏濟西對云達皆為沙吾事

西對御前瞿麥花盤事

源氏君彈和琴款貫河給事

内大臣毀源氏給事

西對姬君事也

又かそくことありそとばいんせり
奇おもあそくこと乃床なりき
源乃奇なり玉うつ此君のそ
あひ山のそほりありき
此もの移き成注の多し移んと
あり源乃奇一首の外とこたひ
乃初るし四以奇為春名とつり
むしけ一物二名あまの奇初めて巻
の名とすとつる也

^秘 源氏所古藏乃六月乃事又此是
源所古の夏也 弄 幾回幾

豎並三

いそあ川責日ひんし乃けりなり
いそあひん

^何 京中名跡紀云 釣殿今六條院是也
京中名跡紀釣殿院号六条院是也

天皇此御所之六条东御院よりあり
宇内物院より之を六條院乃物院

六條系極なり各別の所也

^多つが ^多条ノ使有物殿細涼事正前

池より細おろし 精おろし さいあま

らせよと

^因 けり後へちんかとの類也

^む うつふ系此使のるが六月比が

ひりりなりぬちおろし池ひりりか

そそののふ本まきにておのておのり

あれふりりえささう入おとま

中橋よりかきくくあよのを

りりハ橋よりあていりりあ物

はくくまおろしあ毎とむ

ろさ橋わくくあけき日あり

ふらんすくすんあくくは十二日

い橋の日あてりり始りぬとけり

ああてきふすくせをまてまらん

そらあんなに物あて多くしときこ
えと責め給てけり夜よつて多め
君さうあてはやくひまよりおま
り池より細おろしをうしてこ
あかうせし責むしおれを物
うばあしこさうりいしてせうり
ふりしむあめかの中へ橋よりとり
いそおろし責めあめととあよひ
ろい^いあてあししてしああをひ給

てあやしおれむしあしりまへにあ
すきものよひりもあははしく
しやならすし散結^結ひよやま
しゆり^ゆちきりのあかん
あつたりすくあうりよ責あとの
あつたむらうりあてのたひはり
えれいこしああしあまひを
いそきや毎りけりてはあま
あうす 今葉あけ責め日約あま

まゝとてつとふとてつりしと事
は物沈りしとてつとふとて
のまゝとて

中おの事と 秘 夕霧と

志うき夜上人 秘 六條院家司と

中川よりとてつとふとて

西河の 桂川と 東川の 賀茂川と

はま河に點と 佐と御と

西宮抄 禁河 渡川 右衛門府

揆知 葛野河 右衛門府 揆知川上

夏供點と 今案 葛野川の西川と

と如禁野 已上箋ノ分と

秘 桂川と 中川禁野と 中川と 小禁

河と

康保三年閏八月十九日御託云遣九

看督使巡揆洪水其五六条及西河

渺と如海と

夏乃泉の舎と點のふりと書乃胡

いハ鴨乃壘お祭と必書敷と云々
く包丁譜見ゆり也

通信明ト

少真此よりうらみあはあつて西川のお
うにあふんしとすくもん

大和

かともら此瀬りあもとあゆれと
秘せこそゆゆ先夢よみあやと

大和

悪せせの物と思ひすかと川のせり
あはあゆのやなこりりして

曰

あつてはよと秘あてとあかさい
何ゆとくといふのうりわて

今葉堤河ハ東河之葛一前より
私云義畧今別注加々

ちう紀川の 昇 賀茂川之

賀茂川之 北条極 六條院(流ス)

何

事ハ近代事之
近貴川之賀茂川之東極河之六条
へありす事之近代事之上古あり
なりと其上六條院名字河原大和

乃六条院と摸すは後院後り
ハ亭子院の亭領とて醍醐天皇
行幸ありき伴柳切之首尾
のおむいままらみもをりりか
と川のせりよ六条口より家々
とてのりあはくはくりてとて
をりあり河ちり美川ハ切と川句
瑞乳

御記云延喜十七年二月十六日此日

^秘 春入六條院此院是右左大臣源融
宅なり大納言源朝長退院と
笑者川とてり時の景物とて

い
ゆ
河
石臥

^美 龜 初名 伴々石之性伏況在石間と

時ノ景物ノ貴スル也

龜 板ノ物於此景洞味ノ例

^毛 亭子院御集并り不固儀とて
亭子院法集とてしやの物也

中へゆくてりしてふらりともふか
さうりあくるむりともさへせりあゆ一
こころえ一志小りくくふふいささ
せりまらぬおとせりせりたてし
まふふ人くくくくくくくくくく
きししてふらり

和名云雞

青夷和名
伊くわく

性く前あり

大とのくまらり

秘栢木あり

^箋栢木山下ノ先才也

箋曰此席ニハ栢木ハ桑ノ也

或栢木

紅栢
并少

友侍後夕音とゆえ

まらりあゆ

おのみき

ひらりして

^箋水冷水

栢木女子

あゆみ青ひらり麻乃風とわたり
ひらりあゆ

氷多ひやうかり氷之和
ひやうかりあり

何 云子調氷水 任人雪藕絲 千五杜子美大八
備細涼詩

氷室仁徳天皇六十二年夏五月遠江

国司始献氷 日本紀 水鏡 仁徳三

年 戊甲 壬午化少と夏少と多酒

付り日午化少と夏少と多酒

て用とソウ少多是也

花子云ソウソウ少多是也

いふ船のワきととんと麻の風しや

しひやうりし少多はひうてり

さうりやん

水飯 水飯

俗に比目と云飯之 一統干飯

いふ不しし少多あり

いふ不しし少多あり

いふ不しし少多あり

いふ不しし少多あり

きりくつ物く

身 千飯あとの顔うらむをむるあつ

秘 因りしひやうの物く

或 今乃世しとありてひあつる物く

即既しういふとんふひあつて飯

あけくしてあつる物く

わうごきつらふ むりてさうらふ

美 早達ののまこ かこ 比と目久舛く

身 花うらまき物く

秘 ひーう素てくをうらまき物く

り 早達く

風らしくゆげと日ぬらふらうり物く

秘 夏の草むかり

因 たり目の夕せみかしのひらき物く

折く

せまぬ 多 藤上院行刺製

川 流はくもとすくあはは輝れあは

流はくもとすくあはは輝れあは

水
又乃くむく

源河多は木末後夏園生多微涼の地之
雖避暑く也

枕多子之 女多法あり物持于其言より

船く

源の向くく日午六条後涼く言ふ
多しくくく言ふくくのわくく暑く
てあわくくく夏園生微涼の心あり

ひくいの法多く 女多礼

女多礼多罪

くくくくくくくくくくくく

女多礼多罪多

あきひめくくくくくくくく

女多礼多罪多 或多想多くくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

女多礼多罪多 ひとくくくく

女多礼多罪多 此くくくく

兼 帝紀くふノ字ハ初クテ後ニノ字入

ニ直衣純と

兼 多とくーひととらぬ

一本 圓解衣盤柏亦朝恩 東坡

あつあつとらぬ

兼 じ公安ヲ所クセウケ侍名ト道彦

ーとらぬ

おまひひとらぬ

或年よりむれとせよれ人も物なく

兼 子妙 して物とらぬとさるるなり

源の当官相とらぬ

めつーとらぬ

秘 くのあつとらぬ

或 内大臣の君とらぬ

かーとらぬ

言 欄のくく背とらぬ

いそきーとらぬ

源乃初

兼 源の初

源より諸尸^ん人^らうく^るは^たん
史ケント^と

因を^の悉^の事^はい^人此^事程^は
^に出^る多^く也

か^うく^るの^じす^め

^義外^服 ^を若^母少^将悉^と人

也^と

并^少将^よ

^義ケ^紅梅^人

し^し

^秘并^少将^綱

さ^まし^く

^義并^少将^の必^名

大^志心^者此^比身^りく^る

^義堂^者未^見 吾^比此^比身^りく^る

て^は心^と

^何堂^春内^大長^身人^知て^は子^ら人

り^して^もあ^りく^るの^り也

^小所^も知^くも^は花^はさ^きす^あり^はか

身^の明^らき^しく^を身^の心^也

^心身^りく^るの^心堂^者あり^は女^の心^也

の母がねとよみん

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

兼 兼乃事 兼よあるとあるとあるとあると

わが我の事と人よ對しては時
人れと我とわがてつるは縁よ
ある事と

ゆしありきりし

美テ源心中

秘 しかる海しるるしと論定し
る

いとあがりしは

秘 美 内大臣の息男女多き申之 源祠
源乃初也此の内大臣の妻子ともあ

まことゆり物とて

をくろく唐

兄弟お母とて

美 他版此教も此ヌツ云 凡唐約ハ兄

才よ比すり教

ハ 雁ハ父母次りり兄才よと列とて

りすり物とてまこと唐約の礼とて

好忠集

五いりもむりくるれてとて

ともいりとて我なり物とて

いとくはをまらう

箋

女云 紗く あまうりに事なることなりと云 貪ん

かり 權巻りりて 権 寄りありの

玉言 昇へ念比 なるん之仙之欲は

来ん之箋曰 け美未変

あつま来念比 なるん之あまうりあり

ん之むらうろく 来ん

欲あり来振 なるんこと事り福はく

かり

或卿 院の貪ノ字ツヨメリ 欲カ多キ

仙也

いせしり 来ん

河之

箋

念字 源ノ西子ノ女来申之 秘同

若れりも物り来んさや

箋

源ハ思あかばりて 来ん人あり

秘

と云 蔵へ

我身と云 所もかく思あかや 源んか

のり出り人しる 源ん也

さすもとて たるあれ 事りあり

源の推尊に内大臣の息女へ更事する
る其故私ハ元(出)けりや

死美

内大臣ソノカミ乱リニ父メキ給程トシ

ま美されぬやうに

りてたふれたり事たりあじとよく

りぬメ人らてあふこ秘に上美

内大臣もそのうみいふされ事と

あつこ

旭美素美くすまわあよ

月美ハ日老モ湯水よりをのくのりこと

くいつり内大臣の息女ちりたねと

ア服美ハゆると

た美り服りありし女子やてさや

よ美ちりぬと

た美り服美り美く美割美り美事美と美ま

一美素美は月も湯水らあひつを

くのりてあひつと

中志やう君とくらうくうまふるあれ
えいもはめうも

花

父方此事の南めうぬふ実法か
とよめとよふんたりたりと思ふ

秘

かきり 素徳をいむては

花多ク音くくる是ハ柳木のい事
柳木のとりりらて志出るよあれ

昇

弁が少およしうては事法のゆるぎ

内大臣乃息の中物をい香のりう

ありら事あれハ物うう伏せ
ゆあうぬる也 花多ハ中将

夕霧とてはれも存行不書

或は昇ノ後ツノス河院曰柳木の花

院 院まう

同

柏木

美

箋曰夕音ハ花多院ては 此柏木

そるぬハは席ハ弁が少おぬ後見

友人事ハ 柳木の今日ノ席ハ春入ハ

ふんて源氏弁少将ヲ指シ此事と同
治トシ舎見柳本ノ不審ハんてさうり
中^毛あ^毛さ^毛わ^毛い^毛実^毛法^毛の^毛公^毛で^毛あ^毛と^毛ん^毛
わ^毛ー^毛と思^毛か^毛り^毛て^毛と

私^毛云^毛は^毛策^毛ノ^毛義^毛を^毛て^毛然^毛花^毛多^毛ノ^毛義^毛シ
月^毛一^毛一^毛さ^毛て^毛は^毛朝^毛の^毛所^毛は^毛義^毛に^毛朝^毛信
や^毛さ^毛う^毛の^毛落^毛葉^毛と^毛て^毛い^毛と^毛ク^毛各^毛に
源^毛の^毛さ^毛う^毛り

かおと結後とは

^秘あ^毛あ^毛て^毛ん^毛て^毛さ^毛う^毛り^毛皆^毛連^毛枝^毛と^毛あ^毛を^毛て
さ^毛う^毛て

^美か^毛お^毛の^毛弁^毛少^毛お^毛へ^毛 次^毛男^毛印^毛梅^毛へ

友^毛信^毛法^毛ハ^毛三^毛男^毛た^毛出^毛つ^毛皆^毛へ^毛さ^毛い^毛内^毛大^毛信
息^毛の^毛連^毛枝^毛へ

あ^毛ん^毛や^毛さ^毛う^毛の^毛落^毛葉^毛と^毛て^毛い^毛ひ^毛ら^毛へ
落^毛胤^毛腹^毛と^毛さ^毛う^毛て

^秘夕^毛房^毛と^毛さ^毛う^毛て^毛の^毛さ^毛う^毛て^毛さ^毛う^毛の^毛居
ま^毛ま^毛う^毛い^毛う^毛さ^毛事^毛也^毛か^毛ー^毛く^毛さ^毛う^毛給^毛ふ

ゆへ

源氏夕霧よの源朝と存家と存
胤版乃女子伝ありまひちんとて雲
か存の事とほくく思ふそとてあ
にこの夕霧

源朝夕霧よの源朝と存家と存
胤版乃女子伝ありまひちんとて雲
か存の事とほくく思ふそとてあ
にこの夕霧

人よりき名の

夕霧と内大臣のじよ曾い
るまよといふきんといふ

おる

ら
まよとてなれじよのよ君い

おる

近江とて雲井存れ姉妹あまはた

あまのうとていふや

内大臣の女子とていふや
秘

を
父の大臣此ノヲ務ムル始末と云われ
ぬ事と源氏の念入り思ひの如
ての事あり

箋曰川方 ころやころ多の心
實丹所なくともり紅て秋宿と云れむ
ア貴肉のむと此あさりくヨクくナレ
ハセメテ同じけよヤクハ、ナクサメニハ
を御君ソセメテハ為子ヨラメトくハ時
を悉くしヨハを御君とせめ云詞ハ

十分と云ふ事ありハさやうあり
タニト云ハル詞符合セリ
ろりしゆふやあり

河津 嘲哂ハ 秘箋曰

る事あり
源と内大臣此にあり

箋曰ハ後皇子此に源と内大臣同ク云
ひまありある

同中あり

は字へ

有源く多し人ハ心よ〜〜の事候

まらふ心

まのて中ねと〜〜

内大臣の夕音よ宵井の宿とせら

〜〜の事

かゝる福〜〜ととり〜〜

源のけまり〜〜とを〜〜

〜〜との心ありて〜〜の夕人候と

かゝる〜〜

事子候と

かゝる〜〜は字を

〜〜の事候と

つまて〜〜と〜〜

〜〜と〜〜

義目は一浪源乃心内人

物始〜〜と〜〜は字を

と〜〜と〜〜

多い乃姫君

玉〜〜

内乃^昇相々此の心く成りてるや
又うらむか女も人よすられりとも
むねのあはれさまりて

^秘一向よ志くそてはしりてうらむ

^美箋曰内大信ノ覚悟もせし風玉警
とんせうさくとも

いとまひりく

^美箋曰深ノ宴之ゆりせあむ美之
むろくそ養育く成深静ふる此

括下中ひありまゝまひり

少云^秘道作云玉ツ内、乃をなす一
くあふやうよりそ妙くあはれ
育ありしは時かノ言息持くと思ふ
せなはんの心く

松是すそそ御君ノ事ノ次むろく
の事と深乃とや明くやとあはれ
ら中たあり

夕はまゆく風とすくく

只夕なりかりり秘くありし日のよに
くもり夕にそこれお日にたろか
くるより夕なりあり新神又風
くくくゆきくくあまの日のくくか
ふやと涼くくか

心やとくくくくく 美源の詞 秘曰

若くやとくくくくく やすか
深の西の射くかりすかたれ
いとまぬくくく

深の年かとくくくくく
あまのきとくくくくく
あにゆかぬくくく

秘玉くくくくくの詩音く 美曰

秘 ねくくくくく 秘

ねくくくくくくくくくく

とくくくくく 何外也

秘 少云おくかりくく 秘くくくくく

くくく 皆秘ノ義く

志のひそ

^義源乃をむすにむろく人ト給て義曰
先才うらとむへんをヤうんととてと
出多くとん給と給ノ近々れいむとてり
りりのあて

^秘うら志のひそ源のあて

少お侍後おと 秘あれり源の初と
^義弁少お侍後おと 少は一岐源の初と
わてまうりてさうり

^義源此借頼ありとて

いとうまうりあ満り一あま

^もば人々姫君のあり一海とあまそも推
そし一あまそひとれと中お乃久法
乃人あて志ん一やく一まうりて
卯根りやとてぬん

^義五と先才とそ不知麻妻思申と
中将乃いと志印りの人あて

何美法 或質朴

抄

夕霧乃言法をり 義載

義曰夕霧もうらく乃公をてい
友人とうら人此はまはるる
あふり

少将信長おのいゆ方へあうく思
ゆと夕霧此言くくまへりて
わてまのいと源の初

昇

栢木中將志知くして西討へゆ
あもあすす中此君連りりあう

ひく又夕霧此志知くあてさ
あぬくと然苦い時、右中將、右
ん好右中將、あまりて志知くりて
あゆとあまり事や

私言始末乃折栢木、不素い中將
又夕音勿傳

あ乃くいあふり
少将信長より兄弟と志知く
あゆとあまり

或

御説くうられみえとあそすよ乃め
里よりほくくくひく

私に義自然あわやりの如く
くくとけけてはんくく子義
て用く

かくくくくくく

河東新丸

道々直人曰く

あそくくくくく
かろくはねれあうりあう人のじら

めとく

ううられ人々意の中うう種ひゆ

くくくくく

少義直人く較あぬと人意れ中
といんあうくくく

大北家のあがえ

六条院より入り内院へさもあはれわ
か際よりと世同のあがく六花簾を
かき早下也

くさくさきやうき
細碑クダクシ

白氏文集

秘

さかとはま責事とと人乃りてあつふ
ぬらひわらにこせいしるる

思ひあす人うりらさく抑あわれと

箋

箋曰は方くつハよへ引渡きて長
は去条流といゆりく思つ方く多
きく私云は方くつハ思ふあす人うりら
と白ときりて方くつハ秋好ハ深ノ

所女ノ命ニテわす進と中宮ニテわ

りす明ふ姫平ハいまうこわさあくわら

しハ中ヨカレ一キニ托サレツイハルニヤヤ

あとうい人乃すまことソひうんよつさ

あ
箋

箋曰やうよんくわとよすり振か

進と所息女ノサキをり人乃を

足ららんぬらりのあはれ

同

源乃内々々まゝにりておやのこく
一責おろりつひらう人まはるいほ
とつらなれ

くそ物一まゝ

箋

玉うくそ書音あふ年來ノ本
さお叶と

秘 福い思ひ

秘

んくのられりともう人まはる
り叶ふと

私人た書一責れあうさあうとちか
やの好え乃事そにほあて人
の責負のふりらわをうけまゝ
ふれはたり

おや人ははるりり一責せんといふと
人させまうすかそ

何

半麦百

石竹

万葉

金瓶

白氏文集

箋

ませいあう

何

架

籠

た
なかりりて交せんふいといあまきあれと
ふすしてさかてしこりりて人
のまゝら紙のりありてしこむら
よふと人ゆりてまき此巻よふの
のり紙かあるともせしりりりた
とくまゝあり

みか
みかうらりりて
後と人かまるとこ夏此事くむら
の事公かくりり

心乃
心乃まゝいと朽らぬや

美
後上人かまると玉うらぬとくま
朽らぬとあぬとくま

并
とこ夏此事くむらよまゝてのり
いせくともありか 并かゝる網と

秘
海の初くむらよふ此親親のり
あま

美
源乃初 有職 職者ト各リ 鷹
美し給也

右の中おのりて

^秘 柏木之由

^箋 箋曰 柏木之淳氏ららとの由此人
教乃中よ居ゆる由

いと我ととほき貴き由や

^抄 忘りりある此弁の後みらるる

とわくは 秘所らるる

振よりらるるまき由

中おるはくは中おる

箋物終の由

^秘 夕霧之別り 傑おすくはる子地

弁夕音ノ事

中將といふはむらたのいふ

^秘 淳乃初言 弁の由

^秘 ねら内大臣をよみあきり玉警音

との物

やうつ物あきまらるる

きりしらすあきり

^秘 夕霧此事くはるる

ふまれば夕暮此は昔かきさなること
内大臣と方くしての如く 形返り
已上箋

何

催馬系 吾家云 とう家ハ姓名を

されらうよ大君貴方せむじよきん
ろさうなよハ形よきん何ハ信さう
うせよきん

右箋 同敷く

齊

よ此初りちかきこらとの形初より

催馬系吾家の初とりてひこきん
とふんとむらうのこきん

そくれんさうれ 秘源乃初

曰借る系乃初

源初 今サラりてやサレヨリハ家や

あされきトチノニニテ月ハヌト

箋曰 齊

屯

はれさうれと我家の初よあきことく

一貴じこソリの作はきま

多しおさあきしうら

美 三條文よりかんせし時の事し秘

ひすひと美あじふとらげと

は 万代の野中よとせら結ひ松ん
ととあはじうかりん

私美 秘未石引くは方及らるん
因私とけしと不遂也

まうこ下程うあり 乞五葉なるも又及らる

美 漢英事

秘 源よまうせりわくらすまうと物と

うり記さまふ 源の秘

美 私云 懣陶しうまふ 美曰 嗟嘆ん

うはか多所のつと

花是ハむろくれんし思ひしう事ん

むろくれんしその源と内とん

秘 述懐シハシをヨト字ノ治

むろくれの念はは源と内とん

内中らるれつとそをさるん

おやと志しれしそまらんとの

私玉うろのんよやうよ深と心大と
夜の隙心あふのりも此ら矣又り
志し進なさん事をもつと知進ぬと
るが如くそねの深乃熱切よおりす
多と少を兼て矣又よ志し進ぬ
とむしづのすこのぬらん事とが
うう深乃深心とあうりうらん
い流とんとなくおほと
月とが終らあおせ

猶者らうてあひらうや

夏ハ灯乃ちり終とあつまると

かゝる中々とせとせ

或

りやうとととらうととにあはらうと
篝火いりあれととかゝる中々と
とがとにいさくきく物あせハあひ
うあせ

わう者たうまの人のあつた 和琴

アらしはしとく志くらくらきとら

美

昇云夏くめりて美曰諸樂器平
調シいろはトメ五常一示之始トる者
ナシハ今むうく初字トキコニ純平調
勿論事孔也別平調ハ祝言ニ用テ
四季通用ク言ハ平調ト云ハシ

やうのほはゆふよひとらとらとらと

秘

初琴とらとらとらとらとらとらとらと
す美和のうやと思ひあをけりゆかまは
くく志くらくらきとら

美

し甲ニしノ志くをの調リタラ源の比
流メオテハ和琴ヲシキ流ト琴流之
ハ一版源の詞

好乃く志月もすくしき程はたあ
くあそそむしあしとよく流るし
あつせとらとらと

秘

月也くくちとらとらとらと

昇月かよふよとくちく此の

笑

義曰今葉筆ハ小言ノ器ニテ奥ツカ

ク物ニモシル言ノ安可あり和琴ヲ

ナモノのわりと物言あれいといちく

あらしの此言ノいまあう言といちく

涼ノ月ノ下をて有るを奥也又今葉

和琴のい人よんつ時ハわくゆくハあ

らてとい和琴の物あき此言ノ初好ノ

折ニアヒタルヲ云きらうといあうき

とい和樂意合とていとい物言

けまらうと忠乃言よ和といあひら

あうつたうといちくや 以上義

いとい言志といていとい志といちくや

秘

志といちくや 昇曰

笑

義曰といとい言志といていとい

いといとい忠強の和といちくや

経ツステハシル御よといといき志とい

たうり

養曰志^レけりや^レふ^レりひらき^レら
悉乃^レ此^レ法^レ也

大此物よ 和琴也

は物よ^レ和琴と^レなり

才五^レ弦^レを^レい^レあ^レり^レ事^レ々^レあ^レて^レや^レ

よ^レた^レく^レ六^レ弦^レテ^レ百^レ乃^レ物^レ言^レコ^レモ^レル^レト^レ也

は^レあ^レり^レあ^レわ^レく^レ此^レあ^レき^レひ^レ物^レの^レひ^レや^レり^レと^レら
の^レへ^レり^レふ^レら^レあ^レん^レい^レと^レう^レあ^レは

ふ^レその^レあ^レき^レひ^レもの^レ言^レ拍^レ子^レと^レう^レの^レ言

拍也

此悉^ニテ^レ法^レ樂^レ悉^ニテ^レ調^レト^レ也

私^ニと^レう^レあ^レは^レを^レは^レ詞^レの^レ末^レは^レは

き^レて^レし^レひ^レん

屋^レ戸^レと^レし^レは^レう^レか^レう^レみ^レせ^レて

皆^レ式^レハ^レ言^レ籥^レり^レら^レあ^レり^レ此^レ樂^レ悉^ニテ^レ也

事^レノ^レ字^レよ^レカ^レヨ^レハ^レメ^レヤ^レケ^レリ^レケ^レ曰^レ物^レア^レサ^レキ

様^レナ^レレ^レト^レ手^レノ^レコ^レモ^レレ^レト^レ云^レニ^レヤ^レ以上^レ養

ら

いしうあはやましこととてんうきを
やましこととて和琴此名勿論也志うれ
ともしとてその和國の事とてつら
や若又持人ことかうれる又和琴の
名ス、カクナメ花ソノアツニ 結六
スナアリ

を

和琴事人 四海の流あやまき
あうや

私うきまの詞いしうあはやましこ
とてはまてうあうりるよ此初は
はまきるうり

いあくこの國の事とてあは女れあり

秘

女かこれありあうり物し

美

笈回た樂ハ大唐右ハ高麗ハ事と
外國ノ樂ハ筆かといハ女あありあ
りしき慈あれとて深ク事ハ心ノ学
んふハ女ノタメ物きうりあへ
和琴ハ後樂慈りいあくうりて

たもたか紙板あれとあたら我玉ノ
悪ニテ外に求メヌ志くあれい女のこ
り相應かろく一しあつよらりぬき
ふとてやふりりもあすといふ
乞く程一儀あつ一 以上箋

物かたにのりあらせそか〜ひま

涼乃玉う〜人のけり初〜

和琴とともゆきゆ〜

^秘若ハ樂よゆり〜^秘進代大〜ゆき

^箋若ハ流樂悪よ合とをり〜進代漸給
と備ハ一卷今よ残まり終〜五常

示斗傳しり

ぬ〜^秘素心〜

^秘和琴と琴か〜れ〜く〜ま〜さ〜ろ〜ふ〜

事ハハク此物ニ

義 和琴ヲ琴ノ中ノものニシテ此物ト云ハ

事ハハク其板ノヤコニヤカナラヌ又板ノ

志實ニキ得ル事ノニシテ此物ト云

此内ノ板ニ

義致仕

相アリテすカハキ此物ノ

義 和琴ノありある事ト云

義 菱捨片ノ捨ト云事アリ

和琴ノありた此物ト云て此物ト云ハ

相リト云テ右此物ト云テ此物ト云ハ

菱ノ事ト云

源語類字云

管攪

和琴ト云

私云餘ノ弦ニありテ

或 第ニ又すくくハハク事ト云 琴ノ

あり細ク官ノ弦ニ志リテあり

私云此事不審ニ云

此物ノ種ありカハハク

義 今曰和琴ハタシヤカナラヌ又物ノ音ナルシ

法樂悉合とんち志か堪能百行
よりくし~~熱~~別樂悉乃棟梁トノ
音律シ此悉ノ調ルト中々えたり廿六
上ノ調におほくれあそい物の喜ひやう
とらうのくさうめんやうし~~一~~に終あり
し~~し~~可~~知~~く

いふふかくしそひきまの初きし

内大臣の和琴のよとられらるゑと源の
むろくくさうきうせうぞ

かろく^秘んえていそとねほと事たれん

^秘むろくくさうとんぞうぞ

玉ノ心ノ中ノケ此悉ノよあきかて

ゆり志あうふしはみ紙抱くく

あいまぞ

いそとあかとも事たれん

玉ろくくさうとんぞうぞ

私此いそとねほと事とん和琴と

いふくくと執心乃候れ持てきり

いづ進していとも父内大臣と玉うらの
いぬしく移りともいづて但いづ進して
と心いきていづるいづる

はわらりあてさうぬつさいぬあそひのあり

^秘 玉 ^秘 玉うら乃君此初也

玉うらのいづ内大臣のときく事と
あらんしと也

^美 私言源へ玉うらのいづ初と移

玉乃初此六條院也て御拵乃次
内大臣ノ物音ヲ受まはれぬてとあ
りたんやと也

あや一素心うけあよ

^秘 誰とひく人らあまうさゆ進とすくれ
うらハるさう進と也

^美 あや一の人とあまうさいづるれ

くしたまはとすうもさあやとを路一
はてハさるうは橋若乃ありをう
やと也

大なる人のむくは法事有りあり
在安きまよさ北と思ひされいさや
くわくぬり紀事のもを分よせ
むろくのまて

さり
是は源氏乃西初也 秘日

源初 九日さう一賢ノ字こじひ
人ノ分別くくちと初解の初
かり

私賢乃字とるふ字とさうこ

うをる初也わさる初よ此初と

あひすしとと 昇乃中ひさや

たふ也

秘
ひつはかきくさりさなり わ中ひ
るやうたふ也

美
上ノ初、ひつひのますつらとさ
の初也 東夷に取あして名夷申ひ
つらとのます

西中人乃西あそひあそまひ清人のはり

さしめすは

は
圖書寮

圖書寮

書書累代の御物被在

所也

和琴の伴柴諾伴柴冊等今作給

之仍諸樂器乃最上りりともて

和琴の伴柴諾伴柴冊の二神代

了りて夫らりり此物とてともて

申しりりハ尺く結くす又とも思へり

天照太神のこりり給神意より

奏らるともえりり宮初ハちち張をか

らてはけり成りりあししりり和

琴とて物ハはけりり出りりともて

月日此世巫此にりりりりり乃

はりりりりりりりりりりりり

しやあんりりりりりりりりり

とて女官とて書司とて和琴と書

司此女官ありりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

るる妙也

うの中うとあわと志けくまはてふり

何

内大臣とくれらわ和琴の沖いづれにせあ

まはまのわううの君はふらり

むまらう人まよふまらう家歌せらに

らりてあやと志けくまはてふり

まらう

美

内大臣の事(こまのぬらう)とあ

うらよあ

美

秘いワうりあてうらぬつきはあ

らかりあとおとあはしやあはれい

あひのぬら

い

美

箋曰い和琴ノ事(中)と云又い琴ノ

と云れ

何

い事(中)措きす

和琴ノ事(通)ハメ見テ云れ

ておら

秘

こゝろをいめても心は折れぬ事なり
まよふて入り事いありしを記す也

箋

法苑珠林ノ人年ツ少ノ跡ノ多キ
物の進いてかゝる事ありしを記す也

一 歳とん

あゝんまゝ〜ひまゝなり

只今涼乃和琴とまゝ〜ひまゝなり

あまゝなり

〜ひまゝなり

箋

花言物氏十卷抄と云はき事粒コトツ

とさゝい三説ありはき人のふかつま
也此の喜姿タふかはみらる物ら
物く〜くまゝ〜く濃〜あひ
あひの心〜自中ノ曲〜セシタレ姿ツ
云事あり其心性ニ相折〜とせ
〜あひ〜早キ物〜閑〜假令
人の大足ニ走ルニ小足ニ走ル凡情〜
〜事乃字〜とさゝい今人の〜人様

を返す

秘

源乃く美ありしゆゆとつり花鳥

ひくさり 美曰哉

いよにましく有るまののゆ

さひ

美秘をゆゆ事

何れもつり美ゆ

美 曰琴と花とけいと書湛ん此百鳥

鳥

湛とみ

重く変る

已上美

私之琴は時とわ私琴といく角

并

志る海より

花鳥を委しとつまかると言詞あり琴

何

乃秘

ことついに琴粒とつり私琴ふと

ほいことつまことさつと事あり物

戌十卷秘抄に及つりたたと人

ことついにそのまことと或説事乃

字之私琴の琴の字はありす

こまめとゆさまらる福やソはらんと

^秘 只今源乃ひきおつるくくひる終

是らりたはらる事いづくも人ききと

思らまふ

^美 ケ口内大石ノ事ノ源の志くくひ

あしとやまこれよりゆさるんかま

まらうし

け事しとてさへ

^美 笑曰よよけ事しと云初あり日丸是れ

て付眼又は次ノ詞少とこ乃何事し

よりとあり一日丸はてま又又まよ

此何事のこもありききつて付眼

ゆき川のせむやうた

^{河美} 貫河 権馬系呂 ゆき川のせむ

やうとちれやうとにめふかおんかて

あやうくははらる取わさるはま

はましてよりしきく屋もながき

乃帝にくいひまうん^二くつらせん

ふいあわのそしーまどくろーしーまどくろふ
しーりまててらやらかろん三尾

^むゆき川のせこれやうたいたるむろく
とつんとして下ありしと略しして
アしふ村よるやうよまきてゆきや
又あやこるつしとあま川の新よ
ありむろくの君此事成さるを
うしきふゆしよすしーしーしーひ
まあはくあわわし

昇

回やうたあろ うしきまよる
たすくしとありん昔多りしと花の
たこしふ村よるしーしーあろは
る初とかなん又しーしー成略し
しーりしーん 一劫

おやこるしとしと源氏むろくを
しきぬよをそしーしーみぬ也
しふ村よたノ家申して上れしに
つきてしーしを多しとる

載

義 義曰和琴の律ノ調へし月くさる費
河呂ノ所頗不富しるは但は時夜へ
あノ志くくと源ノ御貴孫時政タテ
呂ニシラヘハラシタルトハ始ヘキ也

おやさくむはら

義 秘ニ義あり源ノ内大臣と云はれ
又ノ義ありハ源ノ名也のやうよ玉誓

のし給つわと云へ 義曰は後ノ
義お遠死子れ方うしてハ親の心り
そじら物うらを流り志さくハ給ぬ
とそこよゆくみておやとさくふと
おちりしうらり

いそひ貴人

義 源朝 河云 麻元 日記
はえい人よおんちらぬ 龍文

秘

義

一切乃藝能あり人よくらていびと
えよしん尤人乃とく
一切乃藝能あり人よとひんあき
と人申ノ不作をたきさるゆ
此樂ハ新砂ノ氣トシ成る後
人此とくひとまり

所々ぬまん

想史慈

平調

文字につきては樂ハ
るきそ女ハ将多つまるとん

即回向來弾る曲 羞人不導相史

憐子哉佳句

美

想史慈

平調

在唐書ハ想史憐と

かく目我純ハ想史慈ト云し曰ん也
又ツ思トヨニル、故ニ女ハ甚んメリクキ
トイヘリ

美

日は樂ハ女乃んノ中ニハ心ヨセナル一キシ
さすう名ニ恥テハひきうあらん人控あ
るくめと云ニヤ

と思ふとて来よいつちり風のといふ
玉の初也

此事より我

ちくわよりよ

常い玉うくの流へ臨みあつぐは和琴
の事にいりちくわ流り我とく
玉うくのわよりよ

つちり風のゆきそひて

是は玉うくの初也

玉うくの初と流へのまふ初也別い
から風此かひひそり各別の言いつ
らんと流の和琴よりそりの初と琴の
類より風此より事流りよ

よひひひて 流のよひひひ也

尺くことぬ人のさあふ者より風
と明りよ

是は流此処方の初也

流此の初也事と玉うくは耳と也

んとりそのまふ 義之河ノ流一曰く
^秘源乃我内んふ事始すらとて中も余
くさうと云又ノ義はけ琴うよん
やて中へ始成中とん 義

^義 義曰秘ノ後ノ義あふをりやう始
とふ早下ノ心之あノ義あふ根ら
ころろと

或は流耳くさか〜ねはさ〜ん人とは
身の〜んは〜んよさ〜んか〜ん事〜ん
私ば義に付て案すりよ耳く〜んね
るさ〜んは〜ん推さ〜んとむら〜ん乃耳か
〜んは純よは〜んあ〜んあ〜んはか
て流の〜ん始〜んら〜ん耳〜んはと
〜ん〜んてのまひ〜んすか〜ん〜ん

か〜ん〜んあ〜んあ〜ん〜んは〜ん〜ん
^義 秘前りありし事
源乃初 瞿麦ああり

いそねねしあところなるもの

美

秘玉ろくの事をとくろり 辨曰

世といはば福をば

秘

世のいそあなは物あれど

いそくも物のはいつてり

秘

昔のるねれ物くろり此次よあそこ

の事をとのあひしり

秘

兩夜物くろりの事 美辨

のまひつてくろあも

夕魚よれ事とあひしり 美辨

係

かそくあまふとこあひしりまきあてこいせ

の美秘人やくろん

秘

玉ろくれかろくろいあひしり

内大臣中ねろくろ夕魚よれ行出

尋出ねろくろてまろくろくろ

美とん

玉ろくろ内大臣とせくろくろ

夕魚よれ美秘人やくろん

らうしに思やすく入るとも 辨
此 聖文奇合判方順林も様とある
きたる此を紙とくしとまかりあり
くられ素 今業を此とく林文血上
の事とつり心法のとく海ありともか
早くはありれり希よかそくあり
露は奇よき初とわぬと奥
はよんをくくありの極ねとあや
—みるんをわつりくく人素と也

これよのまつりきいよう

おほほり

ま経あもりも 秘 みるん

わ ありち林乃あやのふこあもり

いせくもあかいいにありす

辨 此 ありの事をくわらわ事

此 是ハ此はくありありわて父は

ま始りありとくく素と也

私河 辨 此 此ホノ義 義皆載之

をむらう

山崎の義がよむいどかきしこのも

ら此福さしとまされうらうのん

弄

むらう母一人の事を早下とさうと

下句又早下と

秘

我身を母ととと早下とさうと

秘

むらうのんいもやの事さうと内

のち後しかうおる為給らんうとさうい

りんあせまへうと此の也

かひりうとさうやと

むらうと此の也

あはれとさうとさうとさうと

源のすしとさうと

秘

本弁とさうと未見と

昇曰

美

秘川方未劫

いのみとあは源の

い出たてをいひとととと中とさうと

とさうと

えーのひとさうと

源のん

つらうとさうと

むらうと此の言へ源のむらうと事也

清き海のおもひおかしきうめて

まれとふよいうち思ひてさそひ

うらん事ととら死くこころさうり

ゆき也

さうん事ととそは

このおもひとほくらうそとて

細くくらうり

こころ事とのこ 秘箋二八此細を

てきり

^秘さゆくらう思案し

おぼくあひる死つさそ

^秘あれり源のち中よさゆくは

物思ひとすらさおのり

ちの物とくらうそとんれす

うくとあひみまら源乃思ひ

てきりぬむらうそあもい

うんそとてあま人のこちと

の事也

かきりるはわかくしとふと書の人か
水にほくつり

^箋 秘書の人—— 案とて

まろ伊ちの路あり

源の玉の所々を我物あてみふと書
上がくたにえあひり——と我ふり
あひまうりもて

さそくこれおりのはうあてい

^箋 たまひ——おれ教りもあふぬふてい

りあて

^秘 皆このあふあてい曲とらうまう——とて

まろ身むしりし人ふらに——とて

源乃我身をあははとて

えん人れあまうこり中——

源乃一かじんよとくれと書とて

しりかりともあふ人あまうこれ教の

うらにありんか女のさああはわと

か死事とて

したかふしたか紀納玄のまはれゆらん
か〜

し〜らる事る紀納玄ほとれんて
とと二んる紀人あ〜の女のあ〜の
源のあ〜これ中みてあ〜ん〜の
ま〜か〜と我事〜あ〜あ〜

えまおか〜あや

^美常々々々 舞々々々

り〜とあれ〜さ〜ひ〜り〜て

河川率 イナナフ 日本紀

^秘宮大お〜とれゆ〜り〜てゆ〜り〜てハ

かり 花鳥鏡る

^美其人の音へむ〜人新〜ハと名〜人〜

尺ハテゆ〜んハあ〜

^ヒり〜とあ〜り〜ハ〜り〜事〜つ〜さ〜あ〜ひ〜ら〜

納とあ〜れま〜い〜人〜ゆ〜り〜

よ〜ひ〜る〜れ〜ゆ〜て〜と〜さ〜も〜ま〜そ〜ん〜と〜あ〜あ〜
かりとあり

おはせいのやにぬらふれむく
うりてせんいひのたのみむ
ろくのさめれいふくありやきん
と涼のまふ事と思ふくまはんとあが
す時もあるも

はまともさうゆていさうらばかゆひ
又むりて涼のむうくくまは
思ふくあひまあひ

いふくあひまあひ 和琴

ひめ君と むう

かくてもおううた 平 日花

涼の南にいふれあひあひ
^れ 風さそりえさもま〜くおほ〜く

涼乃ちゆゆあひの初〜ありとき
あひわしや〜ひるあそもさり
てんとおひすありともあり〜ふれ
涼れあひ〜あれんとおほ〜あひ
あひ〜あひあひあひあひあひ

おひり一人とて

きけ又きてうか

はくば又

^秘害大将あつとむこりてじんとく

をけんと国さけりくとも物をもひ

うすむりりいよらんきんた

^箋此むろくと名ちあしつ連すて

六條院よきさしつ連おろくやと

せめららん東死とてそ故、閑守

はりくともちりりわれ障あつとまそ

とたり

かゆい世を種ぬほとれはつりて

^也よあまねとけいりて世よなれぬ心

源氏乃姫あつといわむんや

まろりきんた

よはつて世をわらうてくると

^也人いきんたせうなましきん

^河人きぬ我かひら乃雲まひ

くくくくくも秘あむ

箋

舟玄一祝玄開ちとふ常こも人々
護すの事と云其儀とてと無お遠
えと人一建ぬのちこれり
物乃ん一と世あなは

とわれちかこの心はまそあな
むうやとてむいおねま

いと朽一責おひかて

とら
はくしんたや月志希山志多れと入

りいさらとありきり

昇秘箋引分回

いとき一かぬ

秘箋子地

箋
や一ありかてとんもあはるん

い外乃るん

よく屋守とて思ひとらん

るきよあふ一祝とる此まら

一素と源乃ん中

箋

中く此物思ひやとらん

かみめりり思ひすくえんよの

^箋箋曰我物りり地物んも源ノ水

せの事りるう〜地物い主ノ始末の義

るも思入し物よあすうい又い

らあら難ケしハさばくよ〜

りり思も〜あつん事れ〜

くけうすじつ〜

^箋箋子地〜 秘ハ〜

白シ草子地〜 誤シリ

肉のねほつ夜

箋波仕

いすり方ゆしすり

箋進江志〜 秘曰

及此人をゆりさすうあめつひ

肉大信の家中此人〜と此進江志

〜りさる〜あ〜り〜り〜

〜く者〜

せり〜とほき〜

^秘秘〜

〜り〜あ〜ら〜り〜

義 翠之ほをくくしき事なり

けしけくしれとく切也

かおれとのほのそよ 義 弁少おれ

義 秘源乃回あふりく霞文おしきり

まを定

まゝいゆて 内大臣也

さうーかーあまーさう

義 秘是より内大臣の切

義 回ゆりあつまことと切らむ事

乃事なりん

ふつの子じくさうて

玉うつめ事と内大臣はあま

みとあてをねし 光あま

世とのさあしんぼふくちりり係

あれともは内府のちりりれすと目

にさし行ゆるとのまを定

あまをねしあまらしきとこのあま

義 ころりて面目と也

む
これ伊初よくらの中くむ初あふん
らすりふらん初くしき事

源のやうりりめを流内府のむが
そくしき初命してあふひふん
あつちうんし子理

かおのれあいのさ
美
むろくとほちあふん 秋日

むかろまきりあ
美
秋大うらふあくすくれらうらむ

きしき

いそあきさハ 美
その初よつてひさ

あんとと

美
秋内大臣の初源は伊女とあふん名を
あゆらたれ

人しき初あふんしき事
さかむ初あふんしき事
あふんしき事ありしはあふんしき事
初あふんしき事ありしはあふんしき事

とて

あうねらぬちうとつすけせよるあうら
ちうとけいあうらよあうらあうら
けいよすあうらあうら

ねとさうまきりよ 義 秘 業 上 所

服く 軒向

あうらあうらあうらあうらあうらあうら
のんね服うらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら

とたにあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら

義

義 田 生 地 師 子 此 十 八 年 紀 源 の 所
あうらあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら
あうらあうらあうらあうらあうらあうら

イ（リ） 山上義

おろりたるか終し

あーの姉君入るその女れ
あれくつり

うれいまひあゑはうせとあらのみ

河美西子

^美玉うくく 欠ある不審トく 秘

さすうにききある不つ青もする

涼の事し

おはくし 河云トく

えそいしあさりふたり

むろくは宮大おをの田いし

ゆりしあつと

みさあうはちりりえりん

西子あはるの先は仕得ゆりん
とむこよれりんとあ
推量之甚れ

と兄中此中あり源の四のふりま
く又人とも御人書也

人ともいふまやうくかふふあつひ
もたしむ

四

昔のまくとほりう初と西あつひか

らんとの源のしとあてしたるひよそ

頼いち君の書事 義書おる秘日記

あふくらあつひくふよらんよらんよ

てつよ志かさんとやとくす

いやはとすあて白くさうせふ

ふーいせまう物と

美ゆーとんと

私人うらんあつひくさうせふ

位さくうりともんさうんつ

七

夕霧中約の位とあつひくさうせふ

あてはさうんと思ひま

八

夕霧中約の位とあつひくさうせふ

秘

急ぐ

^秘

雪か宿の湯争くもとわたり始る
内大臣のとうきわと雪か宿の湯争
ゆしつらりまゝに

少将といふまゝよ

并少将也

むり君のひの祓りまゝのほと也

うすものゝ起るとまゝ始り少将

まゝよ

雪か宿の湯争くもとわたり始る

あつらひはなれと

扇とのまゝつらりもゑとぬとつひも

うゝとぬ

手り扇とりらつらつ紙そのまゝ枕

かゝる也

んとも 雪か宿の湯争くもとわたり始る

うらやまもせ

扇とぬとつらりまゝよ

美内大臣の秘

めて丸

ぬごうのきくよみぬんはくり

ふとくちんのたぐいみ

不勤尊 陀羅尼 慈救咒ん

素戔云
け事不審

鈕索印ん

或刀
鞘下

篋 篋四尸十ヤ千下 明ノ事ニハアラスこと

はくろくろ秘シイハリ

うけのんりも 因つとかりしもの

篋 秘現在方人あを所一向いさうとつり

人ちりるらんふようこと

炎さるるのひあ君 篋 明石非表大秘

む 作務物珍りしことありの意

量あしふあ

私事さるるの居り如く表も地

ことゑゑしてつらんれや

よろけの事よかよりわらうそこと

しきせもつきたもくくかあ

事とあひし

書
ことく〜責はるや〜ことく〜責は
不及くも不及るは中庸の居と
すべし

私ひそか〜
是も過不及る此の之平此字か
た〜と〜せなり

私ひそか〜き捨人とい
おなめり〜責事か此也

素ふ〜事あれと

是れ内大臣の評判也

〜かひ〜
むひそふれひ〜方ひそ也

〜方ひそかひ〜

〜かひ〜
生ぬのぬぬの〜し〜あつ物あれ
ふ方中〜あ〜生れつきます
〜し〜

こ方君れ〜か〜り〜
成長ちかひ

明石姫君也
秘日 明石姫君入内

かゝりん時こしくしき事長七
ゆうと内大臣の終之

思ふやうよきてまらん

美 吾の居の事しテキ面が終之 日抄

玉 是の事村居乃事終の事之

思ふしつらつこふやうに

美 夕吾此事ハ喜まぬのり思給をト

日抄

いそ人しつらつこふ

夕務りしつらつこふ事多由終之

よき事しつらつこふ内大臣終之

あはれんしつらつこふ

美 夕吾此事ハ

日抄 夕吾此事ハ念終よんをんよき

美 吾の居の事し

日抄 吾の居の事しトき人あんよき

あはれんしつらつこふ

あはれんしつらつこふ

花を人たふッムんそそあくわ事
とと念はりうらも也と此義不純

秘事しに志あり 何祐真言

秘事しに志あり 何祐真言
秘事しに志あり 何祐真言

美 昇 因 木 川 方 回

ひうわ何事と 花 是いやわ盾のめ

若ハ何のふ別とありまきいすかんと
しにトへんノびうう今まうり

美 升 盾 の め じ 女 表 の ね と 表 下 子

ノヒトへんノびうう今まうり
秘事しに志あり

いし行しに志あり

夕之務れぬありとやわ盾れとありあて
とあうり

いみしに志あり 重いなる心

大宮よりとは秘事しに志あり

美 升 盾 の め と の まうり

あくのまふつしましんて

美

祖母の言葉しよけ内大臣此一言を

いふりかひひまふとほましんて

かくのゆやと父内大臣はるや

おれまきまのふりつはるよ

美

近江君はるやと是以下を御君はるや

はららよじくわてまて

是とを人のつれ^侍し^来るは

かくてあめあまはれいまはるはらつてま

やうまんとあぬんをまてよ

物ゆく物めうきんとすかしの人の

いとも福くくとをに君はる内大

臣のむすこ

はらこれとめよ

美

むをあをけうきんにすらん

円あかり物あしん

かきりさうさうさうさう

人いついおれせもかきらあふ

みんくろくかぬと

女御乃君 義弘御友の女御と 秘曰

女御の父内大臣の道に君とありて

皇孫のよき所あり

きやぬんづきものよき事あり

かわれつと始ると

日はいつて安えまふ

内大臣此かくの事とありと

たうくおれとるり

なとりのいと 義女御乃御也 秘曰

さこのかろあ 義女御乃御也

中おろとのいとく思ひ人の子と

あしと

秘 柏木をこのついでに

とあひ給ふらうりしと

たれしうりやととらあて

ろま

秘 柏木をいんをい

いせをのりし草に

をいよむれ人とのまひら女御乃也
ゆらんまらうけかろ也

おれ西ありさまふ

義女西の西事ツ云

秘曰

かりしあまき梅乃也

^{向美川}あかこころしほあじ梅乃花とせ

親とわらうとわらへるうしき

^死弘徽女世御此西よりそつて親が

ら草の梅むとらんやとせ

のそりおかりをより^川あみまら

又私云

私あ乃川乃よあがらひしほあじ梅

ひを所よりと
つひりあま
らひ又あま
りしと思ひか
りりし

のくらあじしそとありさそてきにほ

あみまららさまうとつるをむおも

しうくつあまをせりやる

人よあやせかりしとんをそまらうまよ

内大臣乃ん中へ

中将乃んさつと

是も近江君控へ栢本と云くは
と云く

やうては此のたより

^義内大臣常御ノ次^義は^義近江君の方
立よる事也 秘回

^義日女御ハ今又大臣の里にあり
程ト見えたりを升^義尾ノ方より女御
御方へ^義つり給へは次に近江君の方
へ^義つり給也

と云きたく

^義は^義ち^義か^義り^義折^義を^義近江の事也
お^義く^義深^義く^義の^義秘^義也

みせ^義ら^義の^義君^義 秘^義を^義近江^義の^義君^義に^義つ^義く^義ま^義る^義人^義

^義秘^義回^義近^義江^義君^義乃^義官^義女^義ト^義 義^義回^義不^義審^義

は^義近^義江^義の^義君^義ト^義云^義ふ^義人^義

^義義^義回^義は^義近^義江^義の^義君^義乃^義官^義女^義ト^義云^義ふ^義人^義
と^義云^義ふ^義事^義也

秘^義は^義近^義江^義君^義乃^義官^義女^義ト^義云^義ふ^義人^義

てといひてはらふよとていひてはらふよと

何 小箒 和名

一二のめ句れとていひてはらふよとていひてはらふよと

ありきりすくくおれさ

ちいさな紙や紙うみと 辨あつてのさつと

とりてりやうと 秘日

まの君と 箒曰五節、志ノウチ出ル

箒シ小目くトコフくちりもいあひ

てのさつ紙紙や紙うみと

箒曰は義モサモ玉サヨ有又へし紙丸只宿

手ツモミテ切ニあひての小目ツをニテ

モ有へキニマ

いふぢいと志と紙や 何音早

あふううととあひと

父内大臣のふれゆく

片紙をふ紙りてりきせい

上古ハ松ノ殿舎渡はニモ前ツ追をる

源氏六條ニテモこ乃紙尺五タリ

義曰奉ナシ

あはれんところ事 義とやあり 秘 五節志

伊はしやしや

秘 大目とこふあやあひその大節うさふ

義裁し辨曰

義 義曰福ととくへしと也証せしむ歎

どうとむのりて 因井乃箇大

よは目然らふ出んとあやうゆれ

中よ思ひいありやすん

何義曰

あはれ石乃中し思ひいふれ

うらり出ることあはれとあはれ

秘 此方くくると 秘 辨曰川之

此川并流よくけりうさうさうま

そは流はる人の人よ念千の所の

あは中よあはれしとあはれと

をうら出るとあはれとあはれと

昔ムノ川方用
ヤウサレ石ノ
念ト云ヲ石ヲ
ツカヒタキヤラ
アルトコロエウ
ナイン目ノ思
ヤウニイヌラ
云ニマハス
カ

むらねのしるしを双六の石よむら
あまのや

いそあまのしるしをむらとあまの

私物ゆめをみしととま

かえらひひち^情あふりに

^秘一洗活ちちうかろと下もくま

美同くの略し昇日

^因ちちうふちすしき

又ひさいのちうさ^秘は不審

うんうらうくつらうあがら

過去の善悪の因よりて今生の容

色乃好醜を

端正忠厚中来りしつらうを

悪くしるしをさすりにあはるひ

うらあかりしつらうを

人への罪をいれおは

けりありはるしを

河海よりわたりしつらうを

お苗一侍り

秘

河海支流あり何とて然る才一の

美 美 美

美

秘之河ノ才一乃身道之河之過也

善惡ノ因依テ今生ノ容色ノ好醜

ありとて此連ハを即若く之らあり

福ハ罪積キト一説傳テハ深キ人ハ

罪深キ相也此悉ムハ法手秘罪積テ

是ト云ル

花之後乃流相當

美 曰切見しりくく髪事ト云

中流ニ尋 美 云

髪といふちやあつと

顔のちいさ流折之

一之のちいさ流折之

物といふ舌もあつと美 云

一ノ一何くもあつと

^秘 我身は似たりと云はれりしと内大臣乃

思ひ給へ

^箋 父様との我心かくも他人と見
ゆるはれ

か人よ思ふありせ

^む 自らかや紙鏡みせ人なるよを御意の
よかひされは我身此すくせん
く思ひます

かを物し給へ

^む 父様とのとくめへの我れより後

よりを御意はあひて物のまを

^秘 あい立の責まをてあはり内大臣内へ

入まひての御心

^箋 たりはれりしと云はれりしと内大臣乃

あはれりて御心は

箋曰此意乃任まよあはれ御心

つ責かしくわ

内大臣詞

うわくしそあつていそわが
このまじ也

しきくのそありて

^秘 用白あまは障もる也 辨向

^美 内大臣當獄し名百様此彫也

まのれ志とあて ^美 義近江志也

わくまのぬいあめの物あつ

美を以君乃初秘

ゆうしと思つて此が

父内大臣と年来格うしく思ひ
事へ

てうぬんちーゆき

^何 白掌 ^{テウツ} 素然云 ^{モシハ} 若物掌シヨム(キん)

てうぬとはいりとなんぬ之要ら
事よもゆらしてんてふんこ
こさうんをいりかろく素然つ親双
た乃わうあつた進ハむくは様よ
見るともつてぬハ双六のうんこ

ぬつらしてらんやありき
双六乃く責ていそわつらしてらんや
一責し河海乃一祝て然しや
これより双六よりいそわつらして
河海祝つて双六のいそわつらして
うらつていそわつらして

義河海祝双六のいそわつらして
屯一同し義曰拵ノ字ノ拵悦ノ儀
歡在ノ時乃事ノ今不拵ト云ん不

由是ト云レシヤモ双六此語弊シト合
メリ 東坡喜面亭記有之

私勘 喜雨亭記云 弥月不雨氏
方以為憂越三月し郊の雨甲子
又雨氏以為未是丁卯大雨三日乃止
官吏相與慶於庭高賈相与歎於
市農夫相与拵於野上下文略

弟よ弟よちうく流いふ人と
笑内大臣河 綱日

えさうとあるやうにまわさわりをり

^義 義曰はし一勺子細字エス末句はまうで

とのまひさうはつれききと云詞を

其理安しタリ 謂はらち交リテア

ニ夕召仕ノ人の中ナセハ大音の

ら善惡モ耳目ニ留ラヌ物ナシ去レタニ

親ノ仁秘タレ女子ハ何レき事ノ親

類シ云に立レ物ノ况マ内ノむと云所

如トモ云レハつれんち見若レ

かりぬ一青よりりガちくくとまじ

始ハ又ト云義也

かゝその流うすのこ人

^秘 多うら此人うそあつたそと

あしてそのまひさうはつ

^秘 尚してまじすらむと云んたあ

とひさうあつたもまじまじと

失行ハ云也

又ねとあるやうにまじまじと

祿乃んぬくことありしきりぬとあり
の事とも思ふとありぬとあり君
此より也

とありしきりしとあり

義

近江志此を別とあり

かありたはことあり

河かありたれ之 義曰

屯近江志乃初之 秘曰義曰

おがんおがつかかりあり

辨おがつかかりし初ん此字のん初

何

尿壺 私云しト筒モツ者シ大ツモモ千

ノ仕了ト云

延喜寺院式云 大壺一合と今案

小便はの事

義

秘云尿筒ヤウノ事之ありトハ湯大

口ヲわくおがくろト云に湯常ツ木

わく おひとつありし

え福んしありしとありしとあり

義内大臣 秘曰

おつうり〜ぬやく 内大臣の也善也
あやうき〜せん〜

親の為は孝んあ〜る〜
〜らんよ〜と物つひ〜
〜ま〜の終〜

おこめり〜る木〜

義 辨之物〜しき〜ケダ

或 おこり〜責あ〜終〜

責ん

私は義不御死事あ〜く物須
のまふんおり

あさのおん〜やう〜
秘 至印志詞

至印志詞 何 舌乃本性し〜

乃ん已上義

おさかく〜時〜
至印君乃母た〜
又祖母
めう〜の〜大〜

秘を以て國あり

^義別當大徳之 河妙法寺近江國神

崎東郡高屋郷内興寺有邊之

妙法寺ノ村ト云本寺觀音ノ義兼

和九年十二月廿七日格之妙法寺

寂勝王經別一人每年狂度隨業

各入在近江國妙法華寂勝寺其

試定者始後序品盡令暗誦イ

讀誦 今案近江君ト云ニテ知ノ妙

法寺ノ大徳之ふやの傳をさうりぬ

責事以徳舌くや有ケルニヨリテ

あやうりをらぬ

あ人物とたん

也あやうり物

^義秘言舌と人とのあやうり物あや

うらとあやうり物

^義あやうり物とあやうり物

いりてあはれ志とさやめ物ん

花
葉花物
世のあは
りのとき
こえは
きよ

養内大臣の中は感しきまふり
あやうの心ぬくあられりしと
親よあうせんの心あはる言さや
まこと肉大臣ありる故にうて
う言さやあんとつるよあうや
の心ぬく言さもあうくも
いさすをい責人のつるさ
それきらく 養内大臣の初
大とこあやうあらし責か
あやうあやうあやうあやう
のま

あやうあやうあやうあやう
のま
あやうあやうあやうあやう

あやうあやうあやうあやう

吃聲 訥 君得為人 龍耳 盲瘖 痲
乃至 謗斯 經故 獲罪 如是 文法 華經
養同秘何
大ぞうあやうあやうあやう

義謗斯經故之事

こゝろしつらんもよむらん

弘徽殿女御の事

義曰い子ありと云はるの事

くろくこれなりと云はる事

又子ありと云はる事一ツあり

テモ同事女御も他人アラ又云

才ノ事ナレハ恥キニ此サレ共

をいふト云泥ナレハ何ノ中ニモ

ナキ由レ此後流抄スレニ謂不足言

私云此後義ノ義尤面白ク

子ナレハ是をいふ君此事

をいふ女御の事ト云ハレ

子あり子ありと云ハレ

子あり女御一人の事

一はそはに云はる

義ありひりつ子すじ人

なり家人あり内大臣

らんも不定ちり事しきやうの事と
とくく紀明せしきしてびんちり給
てと女御此おひえん西んてくの事
らん西と内大臣の掾りあるあやと

あまこころつ素 見次記

女御乃由とよりああ此 秘内大臣義

~~義~~思ひえり給物しとんちり面申

と更何トモスへキマウナケシハカナシノ

秘文

所分んしそ見有えとそまつり

秘女御の西里り南しきす時まらり

あふくましとそ

義義曰用ことノ義記 女御夜里わー

給時ありまんとしちらん

内すこかしくに立まうるあましり

物さり月捨面申

いとうまうしき事しき 義女御若御秘

はくこくようすまへん志あしきわんしき

かん

^義 義曰事法かんといふ白て福ひ
ふといふくもせそ福あひんす

福てもさめそといふ此何事と云はば
いふとあす

^義 義曰此初ハ下へ流きさう初也別
引ハ十千ニテさう人一年比さう居るさ
う何事と云ふひつらん也 秘月
私福てもさめそといふこの何と

思ひ流るあも何と云は

あといふといふ来てと

^義 義曰おほく大はかといふは福也といふ
かろ難役ともはさあむと也

^何 法花經云身も無きといふは新と云ふ
見あくらみ流るてそ也 行基

いませうといふはま
いふもあといふはくといふも今も
あといふは人てさ人つと也

ひらひらとあかりて

^義内大臣心 秘：洞くく北へ

し志うあかりて ^義内大臣の約

^秘内大臣の約水風くくあつ初と

をり初とむろひひとむりすともと

半々青くむろひひとむりすともと

^秘提婆品 採菓汲水 拾新設食

^義採薪及菓蔬ナリ

^義曰くむとくむとく名とくをては花

初とくえく幸の約うのシ思ふとせ

ぬりり上ノ約。妙は寺別當ノ事と云

出セルは寺は華三昧ノ寺ナシハ

こととりのりて経文ノ引ナ書アラハ

語物ニテ約ノサタニ及ヘリはとく

之詞是又前後ノ句ニアリ ^{ニホヒ}滅女友

此卷ノ文務能ニ付眼

加のあつ物し志まんははゆとくハ

^秘舌疾とあつ物し志まんははゆとくハ

とこと事よのまびるすとも志らん
^義私をよこ此物をしつかりし
をいゝる方悪かろし押へ

おろし責大臣と ^義義ヶ弟多也

肉大臣のきりくく物くくあ
とありそつ秘の人とあるそり此人
見てあく責ともいをい君いん
らすあふまにあさくと物うらと
らりさふ也

おろしをの人

^秘い肉大臣りの大さ此人さふあ
そのそんえあく此事よすうといを
君を物ともある路いなり也

さそいけり女御殿よ ^義義をい君親

そやいつりあふん事候あといさく也
あふそ日かろやんあふん

^義肉大臣親 ^義吉日ヲ撰ニモ及フニシキ
あふそと 續切へし

私
しうき日やわふ先のまじ
新んと思ひまはきふまはく
らうきくあきくくい何ふ
このまひすて内大臣と仰るまは
さしと思ひまは

義
義曰女御へ系のまは青紙をむと
まは父おはくは人まあ
らひあましうき前の給すての親
らうて

わうらひひね

秘
くソムナクも出りて

ふ此四位五位

秘内大臣の位を

義同

いてあからそこのまはあや

義同

あや一青小家り

を江表の我うまは事との給

めせらりあきりことく

秘
是のまは表れはあやまはあきり

思ひやたくく心ツゴリニテイハレ朝ナリ
こんかませしき我ハ初ト十二ゼン
ト云スヤあるやうに人ま
子細らう我力し思ふれよか
身慢初人

うらたのせむらふはらうこたにおうくは
ゆたさむらう

私をたのせむらハ他抄に云ふれらう
又かうらうらともしはらうこた

こせも又一し来あうこたか
はれとあうらう

多しとい形びあやまきと人の中
何 夷のかうひあう

私物よま海と志らすとんすてハ
そは悉方さう

む
あましらハ物らうらたあま批判し
こはれ

こたからゆら来ことの業と

義
私云先公界ノ事ヲ之リ心ヲツケテ
見へしと 義曰此後ハあつり此後
評く

うらまうて凡てこゝに朽印を

義
秘うら安年異コト

さむくつひうーたれハ何とゆらん

然くまうたきうて

おーのわ奇くうて

はーううーたれ奇くうて

うーううてはとありつるを

ゆうて

のうりねとせり中末行

義
義曰上ノ初ハ漢氏内大と和琴乃

とをてむうてはありてはあり

とありてありてはありしゆらん

事やうのりん物乃よのうて

有とんやとてんのてありか

ありては：奇合せり引合て味へ

キ

ぬり来すら思ひえぬほとれうら

奇あしちやけとまぐよ義理先なる

とう世称ともくらく人乃振よある

ひそて懸ありともありしりしと

まらおりしと也物来すらとるえ

ぬほとくろむなりしあき初也

んゆくくうあふ事す

^義 義曰は後不審

私之義はは後不審くは世とあ富

あはしりしはは後しりしは世の

事とすりしやりのんゆくはあ

くは世のあふともありしゆく

とあす古よはくは世とあ

かりし再とあかりしと事す

こうとたは世事とりて好しと

くたらし事瓜公豊よとるは

わくうしあるとしりしとあ

貴事とは近江若狭の事か
きつるよき事か
あ〜と評しきり也

あははきこひさまり

義曰是よりをいふものなり

私之相遠志は海をわづかぬ
流す河なく舌と氣を

くは多し

河透 孝経

何あつたやいふれは人の事は

舌をいふて物をいふ事

より申すにありき
あつり形ひよりさけり

義曰た〜ひ〜と云初ツて書

いふ日死見上ノ詞とさるの件

見れじくひ形ア〜

大抵〜

〜は又はと〜

いそあや—ま—やほろ—たのむる

義

義心ありら—と樂ほくひあて—くら此

あ—くぬもど—きさう—と多外相

ち弟二弟三—内證ノ所公々事

と示ス者也—此ノ詞よ—いと—

くひるれり—あ—す—此詞—

分別—私あ—の詞よ—を御君の—

あ—きやう—は—て—ら—わ—れ—

—ぬ—く—は—も—さ—れ—

あり—は—や—あ—れ—と—あ—く—み—ゆ—り—

何—ゆ—地—あ—れ—は—あ—う—と—祇—所—と—い—

ひ—く—せ—も—り—也—

い—つ—ひ—ひ—く—い—あ—れ

也

を御君奇—は—ま—あ—く—と—ほ—く—家

事—と—り—也—

りや—す—忠—あ—り—あ—奇

也

りや—と—忠—あ—り—あ—く—と—ほ—く—家

と—あ—り—半—事—

本末カキアハ又也

私上下乃不相應がう之女御の位

方への文ノ取リはん見ゆん

此て女御位よまのまじとのりうらとまふく
かりうぬりふ

箋

箋曰をの志乃ひりきく紀く

女御くまうスハ内大臣もいりおひす

る義のゆ

むの君 天下よおひすた

秘

天下 解 アメヤシタ

并

あめりした てんりにともじ(ま)り
やせりくひかしくおひすまあり

箋

私法抄の趣程てんりみてる
けをの志と内大臣の天下よ双こもナク

思ひまうも連枝タチニソムケラシテハ

秘

内大臣くあすいもよと跡り此

連枝をよ知進すしては

此の如くえの如く

^美美曰 系子他乃批判てきりり人まき我
内ノおれ々 祖久ノ念比ヨ思ひあふ
北邊より帰きり人 ともうきッ今
い君の存分ハ内大長と脚下に
いひ給へ

私といふはいさう不審く此の如くの後
いさういさうくやとふをいふはあつと
子地より物辨してかきふおれ也

同一内大長の子息女とてあつと
兄弟にあつては一夜中よあつ
こつとと思ふハ女に思はれぬのか
あつとと美といふは美はあつと

中つ所ぬんそつと

あつと 君女御殿へあつと

あつと美はあつと

^美美はあつと又あつと

秘 私に下義其句く、川合タリの用を
たゞしり文の納川方抄は、凡そ
皆略す

古 人—まぬ思のやかたしありは
中らりあまきと逢う—の所

かあ ^後 少むらりの志す。と
あひまゝ国成 誰う十人きん
かあうのせはとや

^義 寛平此御門西く、むらさき
の、あふ丁此うりよあま一人たのむ
あひまゝとせぬさうりなれ
と 六條御具所。

あひみて、あひそゆとやよあへ
かゝて此用りあひよとま
志し福もじさう、世とつひか、なれとも
湯ゆり外し中、あひさあまれ
と大 秘 同

を
くこまれとくかきれまうとれ
みんてとくかゆりたてとせく
にうきうり一書と也

志^志とせしうのとりかた
くやまやいじうのゆへ

てんくらあて
てんくらあてとくか名のとく一書

後

義
花云に此説志名此交りてかとく

未と今葉真行草ノ字に依テ六書
點ハ凡物ハ必シモ志名ニ此ス其筆揚
のとりとあて點くらあてとふへ下ノ
初といとゆうくらよいかまてのそれを
ちととてんてストアしハ假名ノ草ニ書
タルヲ點カテナルト云ト打切つて
はくやくまうり也

女御乃由方へを御君のまうんて
事とゆのうりて

いよふりたるゆかりや

拾

あくさのこもすこ此池の祢ぬあひり

いよふりたるゆかり物あそむをける

箋

箋曰此川方い女匠の芳らりをい君

といよふりたるゆかりの歌

あや—青いんあを川

二軒

あ—青てくを頼りたさぬよみかを川

庭のみく川のすすめりすこと

箋

花云自記のあ—青事なり

まね

原よりみひらりたさぬのいよあまのうてあ

ひらん田子たさぬみ

箋

河云原よりみらるる君我かよ

つて常陸ノ海方いりて田子たさぬ

波り立出んとりるる

曰

花云古今駿河たつ田子の波を

あまるとも君とあひぬ日

今案は亦此取捨らいつてあひん

の七字あり凡ノ奇ノ神はする事

とひいほねふ人——百葉をくらふ

忌の神と尸をまじりやむ

^秘 奉末来あくるふ奇く只中記此句

と給と千りこ

^昇 上下とのあぬ奇らりや

むららの浦

いづれまき

^{美ア} 之蜻蛉日記云石山よはりりてゆり

とていづれは此のゆきまを云忍

んやうてこ

田子れう波

おが川あのと

^美 みうのく大川のくはあらをいれあ

おとりのまきあやも

を立大川のくは大川あるといふかた

ニヤ但又他ノ登奇ありやてあ

万葉ノ奇ノ心ヲシテ其ノ思ハ
つらふ心ヲ人ノ心ニ上ル

秋
おが川のつとを月入るは

いと清くうらやま

いづもつらての

そとくひひら

志りあがま

笑
河之是もよまぬ右筆の御也

さしこころにすらうひて

笑
河之を代も夷中此人を消島ノ

神出ラゆめて書年アリ凡俗の事

われ但中古ノ假名消島ノ書とゆ

りめてくまら多くゆら

或
又乃ノ書格つきりしむらあを端

くせそゆらみまらとあまゆら

子也

うらあをゆ

笑
をいよ此段ふと思ふまは

秋月

かきく〜あれこれ〜はき〜り

^義河云文と紙乃文はなまよ付る物也

今書文は紙と墨を交へ付る物也

い〜ら事〜や〜

私河云但かき〜こは〜胡〜文もあ

るあり〜

いすま〜り〜

河中家より下也

^義私言下也 河云副長女院女を〜

有くさやうの志あり 幸路〜り〜

ま〜

多子の君

中納言君 一つはも女御の官也

中納言君〜り〜と〜り〜

思〜

は〜りのり〜 秘女御の御初也 義

の〜を〜思〜

^義私言奇の事也 花云女御の初也

ふれ及〜り〜や〜ん〜也 ^{是す也} ^{義三載}

花

い奇のやまうらあめふんや

あつこのあつこ

たもくり 義中細を

を事くゆく かすは

思ひおとさるん

義

義曰是の女卿の細くいおのめ

中終ともとりま あつこ

りじり 野あつこのやうに

りす いをの

つ いをの

以伝法抄編
脱不可一經已上義

秘

素と いをの

り いをの

いをの

いをの

いをの

いをの

いをの

^秘ありことごとのおひさし中細を君の
中へて系

^美美曰中細を君の初之程く并言禮言
と川もる也事ノく入あくまより
かりり 秘一回く

せんーり系ゆきて 美作た事(何日
きうのあもり記て

女卿の由書書れくくよ中細を君の
去へ

ちり記きり

^美文の初あー記のくくきり

秘曰

^{と中細を君の初之程く}
ひらりたりするれうみのまぬれり
けりらゆらたさしききり

^ら一向嗚呼乃由れは立およ汁の詮れ
^む四ヶ圃の若而をよりり

^美四ヶ圃よりりて立出くく云シ詮トス
并云すん不恙く百葉は都アリ但ソレモ

一程よりあつりすくは方と立出ヨト
ちんヲヨメリ常陸駿河海楳津
頂ノ筑前 管崎 己上 義

ふみ来こゆまハ

中細を悉く出せ事なり然るも世へふみ
きりせしめまつて

あかうらうら

義 女湯所約

^秘 女湯此の初くまよとに世所のつきまつら
と思ひゆていふことありしむらさき

於此ハきくむ人

也 父志らん人 女師の思ん

つゝ此方とは思ふまじきこと也

^義 中細を悉く初中細知らし人ハ又カスヘキトク
秘曰

な〜はらん

河立又とら

は〜らん

義 近江志

お〜の西くらつたわ

義を悉く初世師の西方とらゆて
慶義中すれん

侍 中の
とのまゝ

てこのは青の松とありと結とさゆい
んりーり

毛 苔跡乃松と云結句とんせの方

とらあーり也

秘 け奇ハ立出りてら詮らりてさ
とけんねら也

昇 至の君立出りてさゆい
つとあるなとさゆい人深氏物語の

相立

け奇ららうらいつてとん詮か
んて松とありな侍と云
ら也 義曰此他者ノ眼ニ作さ
弁せらる事とさゆい書らり約
かりけ巻又十四帖の内經より句
金之ノ教誡也文法文解一白解卷
相替しり字ニ付眼
又昇抄い人深氏物語の相立

不可然ば人ノ言能ク以テ善惡邪
正ノ差異分明ニありける能味知レシ

いしあま人もりたまひのり紙

^義河云密乃るるら合番此下品のもの

いあま人もりと言れ

^義曰下品此薑物のをせ耳キ白じ花に密

多少の沙汰ニ及サレ

るおとしの物いしあまも

^河粉 白氏文集 一れも兎女子此折れ

いしつけやるあまもあま梅花あま

かたりとつきくそあり

わが天神七歳の時沙多

或面子 シニヤホソキ 荏苒 シニロントニアカニス 遊仙窟

御多いりんのわしきくそあり

あまも

^秘弟子地へ 悉皆相玄りり

^義弟子地へ 義曰此封面ノ作法ヲ書

シタル物語ノ書さすま奇物也上ノ物

おしひのうらみさうりすとすうとりのま
とくみさうりさすあせうらりまけん
あひのぬりまきさうり思ひえりかみの
うらきさうりへおしひうらりまき
あひのうらりあひまき付眼

